

外来がん化学療法を受けながら、安心して日常生活を送るための支援について
—アンケート調査より—

Supportive care for the patients receiving chemotherapy for the cancer :
Results of questionnaire survey in the patients who receive treatment
in the outpatient chemotherapy center

外来部門 所真由美 亀谷博美

要旨

外来がん化学療法を行うため通院治療室を利用している患者に、治療に関する不安や医療者への要望について調査を行った。その結果、つらかった副作用は体のだるさ・脱毛・嘔吐などであった。看護師に相談したい内容は「薬の副作用」が最も多く、「容姿の変化」や「食事」等があった。

患者が副作用の出現に対し、適切なセルフケア行動がとれるよう、患者教育することは治療を継続するため不可欠である。そのためには薬剤師とともに個別性のある対応が必要であり、看護師が主体となって他職種にわたるチーム構成を行い、患者にあわせてコーディネートしていくことが重要である。

キーワード

外来がん化学療法 副作用 チーム医療

I. はじめに

近年、入院でのがん化学療法から、外来通院での治療に移行してきている施設が急速に増加している。当院においても、平成17年4月に通院してがん化学療法を行う「通院治療センター」が開設された。(現在は「がん総合医療センター臨床腫瘍部」の一部門として、「通院治療室」と名称が変更されている)。開設以来、平成18年12月までに12診療科延べ4100名が利用され、現在も増加の傾向にある。外来化学療法では日常生活を送りながら自宅や職場などで副作用が出現するため、患者は副作用に対してセルフコントロールが必要となる。今回通院治療室利用患者からアンケート調査を行い、外来化学療法を受けながら安心して日常生活を送るための看護師の役割

について検討したので報告する。

II. 研究方法

1. 研究目的：外来化学療法を行いながら、安心して日常生活を送る為の支援として何が必要かを明らかにする
2. 研究期間：平成 18 年 5 月～12 月
3. 対象：研究目的を説明し同意を得られた通院治療室利用患者、8 診療科 84 名
4. 調査方法：郵送による自記式質問紙調査
5. 倫理的配慮：無記名により個人が特定できないよう配慮した

III. 研究結果

1. 調査対象

診療科：乳腺内分泌外科・消化器外科・消化器内科・呼吸器外科・呼吸器内科・血液内科・
脳神経外科・泌尿器科

疾患名：乳がん・大腸がん・肝臓がん・すい臓がん・肺がん・悪性リンパ腫・脳腫瘍・
腎臓がん

年齢構成：23 歳～80 歳 平均年齢：58 歳

回答数：84 名中 63 名・回収率 75% 80%が女性患者の回答

2. アンケート結果

1) 「通院治療室で安心して治療を受けられていますか？」の回答

ややそう思う…18%、そう思う…77% であり 95%の人が「安心して治療を受けている」と回答していた。「家族の前では弱音をはかずすごくがんばっているの、ここは唯一自分を出せる場所」「治療中の患者同士の会話から勇気をもったり、参考となる情報が得られる」などの意見もあった。

2) 「看護師に相談したいことは何ですか？」の回答

38%で最も多かったのは「薬の副作用」であり、次に「治療方法」、「容姿の変化」、「食事」「病気について」であった。また「家事について」や「育児・介護」などの相談内容もあった。

3) 「実際どのような副作用がつかったですか？」の回答

61%と半数以上の方が体のたるさをあげており、次に 45%と多かったのが脱毛であった。

以下「便秘」「嘔気・嘔吐」「しびれなどの神経症状」「むくみ」「爪の変化」「睡眠障害」「口内炎」などがあった。

- 4) 「副作用を経験してみて、治療開始前の医療者からの副作用の説明は充分だったと思いますか？」の回答

そう思わない…3%、あまりそう思わない…16% であり約 20%の人が「不十分」と回答した。

- 5) 「不安に感じている副作用に対する対策として、改善を希望されることは何ですか？」の回答

多かったのは「治療や副作用についての詳しいパンフレットが欲しい」で「相談窓口を作ってほしい」「薬剤師からの薬の説明・相談」「治療数日後の看護師との電話相談」があった。

- 6) 「具体的に薬剤師に聞きたいことは何ですか？」の回答

「副作用の内容」「薬の効果」「吐き気止め、下剤・止痢剤などの効果的な飲み方や使い方」、「併用して良い薬・悪い薬」などの説明を希望されていた。

- 7) 「化学療法を始めるにあたって医師からの治療の説明はよくわかりましたか？」の回答

そう思う…64%、ややそう思う…25% で89%の方は「わかった」と返答していた。

- 8) 「実際医師からの治療の説明で理解しにくかったことは何ですか？」の回答

「選択を迫られた時、何が一番良い方法なのかわからない」「医師が用いる専門的な言葉は理解しにくい」などの意見があった。

- 9) 「治療の説明の時、看護師に同席してほしいと思いましたか？」の回答

そう思う…15%、やや相思う…25% で「同席を希望」している患者は40%のみであったが、「症状が変わったときなど、その都度質問していきたい」などの意見もあった。

IV. 考察

患者は通院治療室において安心して点滴治療を受けられていた。そしてそこは「治療の場」としているだけではなく、「コミュニケーションの場」として利用されている患者もいることがわかった。また、実際病院から離れた生活の場に戻られたとき副作用を体験しながら、さまざまな不安を抱えていることもわかった。副作用でつらかったこととして、一般的によく言われている脱毛や嘔吐などに加え、体のだるさや睡眠障害を訴える方が多く、副作用の説明を行う際、それらの点においても丁寧に説明をおこなっていく必要がある。そして、患者は治療を行うたび副作用

でつらい経験をすうえ、計画された治療回数が終了しなければ治療の効果が判定できず、先の見えない不安を抱えており、それは医療者の想像以上と予測される。

看護師への相談内容としては、副作用出現中の食事内容や、治療期間中に出現してくるリンパ浮腫、また抗がん剤治療は高額であることから経済的な問題など多岐に渡っており、相談内容によっては、医師をはじめ、薬剤師・栄養士・美容師・理学療養士・MSW（メディカルソーシャルワーカー）といった他職種の対応が必要となる。特に副作用に対して、吐き気止めなどの効果的な飲み方や使い方、併用してはいけない薬などは、医師からの説明が行われたうえに、薬剤師の介入が重要であると思われる。看護師は相談内容に応じて、他職種のスタッフに連絡を取り、その患者に有効となる対応ができるようにする必要がある。

治療説明時の看護師の同席希望は低値ではあったが、特に治療の経過の中で何か変化があったときなどに患者は看護師の関わりを望んでいる。これらの結果から、医師の説明が理解しにくい患者については医師と情報交換し、理解できない部分の補足説明をする必要があると考える。

現在通院治療室の待合室にウィッグの見本を設置したり、パンフレットを準備し患者からの相談に対応している。また患者の希望時薬剤師に連絡を取り、治療室での薬剤指導も開始している。

V. 結論

1. 患者が日常生活の中で最も不安に感じる副作用に対し、自己管理ができるよう薬剤師とともに個別性のある対応が必要である。
2. 疾患や治療法についての説明が不十分だと感じている患者もあり、各診療科の医師や外来担当看護師と十分な情報交換が必要である。
3. 患者は看護師に副作用以外にも多様な相談を求めている。それらに対して治療室看護師が主体となり、他職種にわたるチームを構成し、患者に合わせてコーディネートしていくことが必要である。

VI. 文献

1. 藤田智恵子、中田和美、高島幸恵他：京都大学医学部附属病院外来化学療法部の活動状況について—外来化学療法における看護師の役割—, 医薬の門、44 (6)、56 (2004)
2. 坂下智珠子：外来がん化学療法を行うためのポイント, 月刊ナーシング、25 (13) 66、(2005)
3. 田中登美：患者教育と援助, 月刊ナーシング、25 (13)、70 (2005)
4. 中堂蘭百恵：チーム医療, 月刊ナーシング、25 (13)、76 (2005)

5. 朝鍋美保子：通院化学療法の実際と看護師の役割, 月刊ナーシング、24 (2)、76 (2004)
6. 仙田順子：外来化学療法における看護記録の実際, がん化学療法 看護実践集第1版、日総研出版、144 (2005)
7. 村島明子：外来化学療法におけるクリニカルパスの改良と取り組み—患者満足度調査の結果より—, がん化学療法 看護実践集第1版、日総研出版、159 (2005)
8. 三木幸代：がん化学療法における安全管理の考え方, がん化学療法 看護実践集第1版、日総研出版、26 (2005)